〔研究ノート〕

エマニュエル・トッドの方法論的変遷
――石崎晴己氏へのインタヴュー（2/2）

鈴　木　隆　芳

【キーワード】
エマニュエル・トッド
石崎晴己

【目次】

5．それは「構造主義への決別」というほどの決別か？
6．訳語について
7．家族の価値はどのように伝わるか
8．移行期危機とゾンビカトリシズム
インタヴューを終えて

前稿（エマニュエル・トッドの方法論的変遷――石崎晴己氏へのインタヴュー（1/2））目次
はじめに
1．トッドⅠ――家族システムの共時化について
2．トッドⅡ――家族システムの通時態について
3．共同体家族の単一起源説の否定
4．トッドはレヴィ＝ストロースの何を批判したのか？

前稿同様，インタヴュー，および注では，下記の書名について略称を用いる。また，言及のあった著書等については，和訳があるものは必要な場合を除いて和訳の書誌を記す。

- 『冒険』：石崎晴己『エマニュエル・トッドの冒険』，藤原書店，2022年。
- 『起源』：エマニュエル・トッド『家族システムの起源　Ⅰ　ユーラシア』上・下，石崎晴己監訳，藤原書店，2016年。
- 『我々』：エマニュエル・トッド『我々はどこから来て，今どこにいるのか？』上（民主主義の野蛮な起源）・下（アングロサクソンがなぜ覇権を握ったか），堀茂樹訳，文藝春秋，2023年。

5．それは「構造主義への決別」というほどの決別か？[1)]

石崎：次に，レヴィ＝ストロースの婚姻システムに対するトッドの批判がある。『親族の

基本構造』（原著初版1949年）では，婚姻システムとは，女性の交換システムであると定義づけられている。当時，私は学部から修士の頃だったが，この話を聞いたときは愕然としたものだ。男女同権の先進国フランスの学者がそんなことを言っている。しかも，その説がアカデミックに評価されているのだから。

鈴木：わたしも大学で授業をしていて，このエピソードを話す時は少し気を使います。女性の交換とは言わず，異性の交換と少しぼかし，母系社会では，むしろ男性を交換しているように見えると言い添えます。おそらくレヴィ＝ストロースの言っていることからは，少し外れてしまいますが。

ところで，トッドがレヴィ＝ストロースを批判する際には，どのタイプの婚姻が対象になるのでしょうか？

石崎：『親族の基本構造』では，母方交叉イトコ婚が主に扱われている。それは，代が変わっても，婚姻での女性の移動が一方向で安定しているという理由からだ[2]。しかし，この婚姻システムは，実は，統計的にはマージナルな存在で，世界規模では「アラブ風婚姻」の父方平行イトコ婚が多数を占めるが，これについてレヴィ＝ストロースはほとんど言及していない。トッドが批判しているのはその点だ。もちろん，当時の統計学の研究が中東をほとんど視野に入れていないという事情もあったと思うが。

さらに，もう一点，トッドは，中国の婚姻モデルについてのレヴィ＝ストロースの見解に疑問を呈している。それは，『親族の基本構造』が，「四川省のある周縁部住民集団に関するシュー〔許〕のモノグラフから派生した不十分なデータに立脚」[3] しているからだと言う。ただ，この点については，わたしは判断の資格と能力を有さない。

ただ，トッドが構造主義から伝播論（発生・進化論）に転換したことを大っぴらに謳ったのは，『起源』の日本語版序文においてだ。フランス語版の本文では彼はもっと慎重だった。恐る恐る書いている感さえある。要するに構造主義批判というのは，自己批判なのだが，それを大っぴらに明言する勇気がなかったので，レヴィ＝ストロースを巻き込んで，出汁に使ったといったところだろう。

---

1)『冒険』374頁。「要するに，この部分は「構造主義への決別」というほどの内容ではなく，イトコ婚をめぐるレヴィ＝ストロース批判にすぎないのである。ただ，「人類の分裂から統一へ」と題する序説そのものの棹尾を飾る節のタイトルとしては，「構造主義」というタイトルはうってつけであって，この本（『起源』）の全体のマニフェストとして，まさに序説を締め括る言葉となっている，と考えられよう。」

2)『起源』59頁，『冒険』377頁の図を「私」（ワタシ）を中心にして解釈すると，母方交叉イトコ婚では，ワタシは母の兄弟の娘を妻として迎え，ワタシの息子は，妻の兄弟の娘を妻として迎える，となる。

3)『冒険』378頁。

6．訳語について

鈴木：次に，訳語のお話しを聞かせてもらえますか。

石崎：特に重要なのは linéaire と latéral の問題。linéaire は父系 patrilinéaire や母系 matrilinéaire といった「系」に相当し，bilinéaire と言えば双系になるが，「系」と言う時には，父方の先祖を遡って自分の出自を定義する事になる。従って，「双系」bilinéaire と言ったら，父方と母方の祖先を何代も遡って，自分はその子孫だと定義する事になるが，実際は，これは極めて難しく，世界にもほとんど例を見ない。わずかに，エーゲ海のキクラデス諸島（『起源』452頁）と日本のアイヌ人（同249頁）くらいだ。一方，latéral というのは，「〜の側」という意味で，patrilatéral なら「父方の」の意になる。bilatéral は，「両側の」「双方の」の意になり，特に原始的な未分化状態を表現するのに用いられる。ところが，他の多くの訳では父系や母系のいずれでもない未分化状態の「双方」を意味するこの bilatéral を「双系」と訳している。これを双系と訳してしまうと，何代も過去に遡ることを含意してしまうし，いずれにせよ，bilinéaire と区別がつかなくなってしまう。そこで私は，断固として，bilinéaire は「双系の」，bilatéral は「双方的」と訳し分けることにした。「双方の，双方的な」というタームは耳慣れないが，他に手はない。

他に，これまでのトッドの訳全般としての苦心談としては，famille souche を直系家族と訳したことがあげられる。

鈴木：直系家族は，まさにぴったりな訳です。今ではトッド人類学の他でも，広く使われるようになっています。「株」を意味するフランス語 souche を「直系」と訳すにあたっては，どのような経緯がありましたか。

石崎：直系家族という訳語が，これだけ使われているのは嬉しいよね。当時は「直系」という言葉はどうかと思い，いろいろ考えた。souche とは「株」や「切り株」のこと，英語の stem にあたる。ただ，英語の stem は「幹」も意味するようで，一方，幹はフランス語では trône になる。souche には根っこに近いところ，という含意がある。童謡「まちぼうけ」で「♬そこへうさぎがとんでformer〜ころり転げた木の根っこ〜」のイメージ。直系家族は，私としてはかなり思い切った訳語だったので，やはり当時は孤独な戦いだった。

7．家族の価値はどのように伝わるか

鈴木：次は，家族的価値の伝達についてお話しをお聞かせ下さい。

石崎：平等主義核家族だったら，家族的価値は自由と平等，直系家族なら権威と不平等，共同体家族は権威と平等，絶対核家族の場合は自由を掲げつつも平等には無関心。こうし

た価値は，子供の頃に父母から植え付けられる。そのプロセスは半ば無意識であって，フロイトを思わせるところがある。ここまでが第一段階。

さて，直系家族を例に取れば，都市化なり工業化なりが進めば，核家族化が進むように見えるが，たとえ，表面上はそう見えても，直系家族の家族的価値「権威」「不平等」は根強く残る。つまり，家族の変容後にも，家族的価値は存続し，実際，それは種々の政治的かつ社会的行動となって現れてきた。『移民の運命』[4]では，家族的価値は，親類縁者，地域の大人たち，教師など，社会全体の成員によって子供に教え込まれるものであると定義し直される。それをトッドは人類学的システムと呼んだ。ここまでが第二段階。

そして第三段階として，最新の『我々』では「強い価値」と「弱い価値」という概念が提起される[5]。「強い価値」とは，幼少期から無意識に深く根付いたもので，一方，「弱い価値」とは，ミメティスム，つまりは模倣によって身に付いた価値のことだ。この件について，わたしは，実は，いわば現場に立ち合っている。2011年にパリでトッドにインタヴューをした際に，トッドはわたしを例にあげてこう言った。非常にフランス化したように見えるムッシュー・イシザキも日本に帰れば，そうしたフランスらしさを失ってしまう。これを聞いた時，これは「郷に入らば郷に従え」説とも呼びうるものだと思った。このエピソードは，今思えば，トッドが「強い価値」「弱い価値」について考えていた頃にあたるだろう。今でも愛着とともに記憶している。

鈴木：一方で，トッドは，ドイツなど，ある社会においては，移民の同化が難しいケースがあるとも述べています。これについては，いかがでしょう。

石崎：トッドにとって，移民の問題とは同化の問題であり，同化の問題とは，すなわち婚姻の問題だ。ドイツでは，トルコ人とドイツ人との間の婚姻の件数が少ない。そのことにトッドは注目している。

鈴木：混交婚率でしたね？　トッドが問題にするのは。

石崎：そうだね。混交婚が可能になるには，保育園，幼稚園，小中高があって，そこで異なる民族が接触し，惚れた腫れたが起きる。そういう接触がないところでは，なかなか混交婚が生じない。

4）*Le Destin des immigrés*, Seuil, Paris, 1994.（『移民の運命――同化か隔離か』石崎晴己・東松秀雄訳，藤原書店，1999年）

5）このエピソードを『冒険』からも引いておく。「諸価値の担い方が浅くとも，**ある国土の上に共存するそうした個人が大勢いれば，価値それ自体は揺るぎません**。なぜなら，個人がその価値から抜け出そうとしても，大勢の個人が彼に立ち向かってくるからです。それゆえ例えばここに，フランス的諸価値と接触を深めた，極めてフランス的な日本人，ムッシュー石崎がいるというのも，かなり容易なことだと思うのです。**高度にその国の文化を内面化したと思っても，そこから出てしまえば，極めて急速にそこから遠ざかってしまいます**。」（太字，原文）『冒険』222頁。

8．移行期危機とゾンビカトリシズム

鈴木：次のテーマに移ります。2009年のトッドを囲んだセミナーで，先生は，ナチズムをドイツにおける移行期危機と見なすトッドの考えに疑問を呈しています。それに対して，トッドは，ドイツにはプロテスタント宗教改革とナチズムという2段階の移行期危機があったと応じます。そこで，さらに，先生は「もしドイツに2段階があるのなら，フランスにもあるのじゃないか。（16世紀後半の）宗教戦争があり，次いで大革命があった」と指摘し，トッドは「調べ直してみるよ」と応じます[6]。先生のこのご指摘は，当時のトッドの問題意識を触発したように感じます。さらに，この一連のやりとりは，ことによると，トッドが後にゾンビカトリシズムという概念を提唱するきっかけのひとつになったのではないか，とさえ想像が膨らみます。

石崎：わたしがそこで最も気にしていたのは，ナチズムはドイツの移行期危機であるとトッドが発言したことだ。移行期危機の主たる現れ方は，識字率が一定の水準を超えることであり，だとすれば，16世紀末から17世紀にかけて大衆の識字化を達成していたドイツで，それから300年も経ってから移行期危機が起こったというのはいかにも論理に無理があろう。ただし，もうひとつ重要な要件として脱キリスト教化がある。ヨーロッパで脱宗教化の第1フェーズは，カトリックからの脱キリスト教化であり，これは平等主義核家族の地域で18世紀に起こる。第2フェーズは，19世紀の半ばから，ナチズムが盛んになる直前の1930年にかけての局面であって，ここではプロテスタントの脱キリスト教化が起こる。脱宗教化の第1フェーズ，すなわちカトリシズムにおける脱キリスト教化は，快楽主義的なものであった。生殖目的以外での性行為への寛容化などが例としてあげられよう。一方，プロテスタンティズムにおける第2フェーズは，ニーチェの「神の死」が象徴するように，かけがえのないものを失った，という極度の不安をもたらし，その空虚を埋めるべくナチズムが勃興した。つまり，ドイツにおける移行期危機は，識字率だけの問題ではなかったのだ。トッドも，あの時，こういうふうに説明していれば，わたしも容易に納得したはずだ。

次に，ゾンビカトリシズム問題。これはあなたが指摘してくれて気付いたことで，わたしはそれまで考えていなかった。このセミナーが行われたのが2009年，そして，ゾンビカトリシズムが登場するのが2013年の『不均衡という病』（石崎晴己訳，2014年）[7]。『新ヨーロッパ大全』の頃までは，脱宗教化が近代性の条件のひとつだったのだが，この頃になると話が違ってきていて，宗教ないし宗教的なものは近代化以降も根強く残るという見方が強くなり，さらに，近代イデオロギーの成立要件として，何らかの集団的信仰が必要だ，

6）セミナー「エマニュエル・トッドを囲んで」（2009年10月16日），青山学院大学総合文化政策学会『青山総合文化政策学』3号，2011年，162頁。

7）*Le Mystère français*, avec Hervé Le Bras, Seuil, Paris, 2013.（『不均衡という病――フランスの変容1980-2010』〔H・ル・ブラーズとの共著〕石崎晴己訳，藤原書店，2014年）

という考えも出てくる。それまでは，宗教の失墜のあと，近現代イデオロギーが成立する，となっていたのが，宗教の失墜とイデオロギーの失墜が，同時に起き，後には個人のアトム化しかない，ということになって，かつてのように単純明快にはいかなくなっている。これが西ヨーロッパでは1990年頃の状況で，ちょうどその1990年に『新ヨーロッパ大全』が刊行された。ゾンビカトリシズムとは，脱キリスト教化の第3フェーズが済んでいる段階の話で，宗教の大衆的な実践が消滅した後でも宗教が培ってきた心性や生活習慣は残るという事態だ。例えば，フランスの社会党などにはその例を見て取ることができる。

先のセミナーでのわたしとのやりとりが，トッドにヒントを与えたとか，彼がゾンビカトリシズムを思いついた直接のきっかけになったとかいうのは言い過ぎであろう。ただ，私の問題提起が，当時の彼の問題意識と符合したというのはありうるだろうね。

鈴木：臨場感のあるエピソードでした。ところで，ひとつ疑問に思うところがありまして，本日のお話を少し遡りますが，近代以降のイングランドの核家族を原初的な核家族の残存形態と見なしていいのでしょうか。わたしが『起源』を読んだ時には，そのように解釈しました。つまり，イングランドの核家族はユーラシアの周縁にあって中心から遠いために原初形態がそのまま残ったというように。

石崎：いや，そうではない。イングランドも，ノルマン人が持ち込んだ直系家族の局面を経験している。したがって，原初的核家族のそのままの残存という考えは誤りだ。ただ『起源』を読むと，そう解釈したくなる箇所もある。この問題はやや複雑だ。現在のイングランドの絶対核家族と，かつての原初的核家族を，まるで別物と決めつけるのも問題だ。一言で言うと，イングランドには，絶対核家族が生まれる素地があったということだ。核家族が存立するには，それを包摂する親族集団が必要だった。そこでトッドの提唱するシナリオは，双方的かつ未分化の親族集団に包摂された核家族があったところに，直系家族の波が押し寄せてきて，その地域がいったんは直系家族になる。そして，その後に直系家族化の影響を自ら脱ぎ捨てたところに絶対核家族が生じる。ただし，かつてのホモ・サピエンスの核家族を包摂する親族集団が果たしていた子供の教育や年寄りの保護といった福祉的機能を，社会なり国家なりが担うことになる。これによって，親族ネットワークを捨て去った「絶対」核家族が可能になったのだ。

具体的にはイングランドでは，親族ネットワークの代替は，小教区によって担われた。エリザベス朝以来の救貧法はその嚆矢と言える。イングランドの興味深いところは，議会が決めると，各小教区の有力者が，その村の福祉や医療の機能の担い手になってきたところだ。一方，フランスでは官僚官吏が中央から全国に向かってあれこれ指示するが，それとは対照的だ。

鈴木：今のお話しを現代の文脈に置いて考えますと，最近の若者が両親と同居することや，両親の居住地の近くで就職することを選好する理由がわかるような気がします。つまり，

若者が家を出られなくなったのは，それを支える社会的ネットワークが脆弱になりつつあることが要因であると。

石崎：トッドも同様の指摘をしている。核家族が成立するためには，経済的な基盤が必要であって，それがないと両親に依存する羽目になる。ただ，それにも限界があろう。当の若者らが年寄りになった時にはどうなるのか。出生率の低下に起因する少子化の問題がここにも影を落としている。

ところで，出生率と言えば，今では出生率とは合計特殊出生率のことを指すが，これは仏語では taux de fécondité のことで，実は『帝国以後』（石崎晴己訳，2003年）[8] までは，訳語が決まっておらず，その時は「出産率」と訳した。それまでは taux de natalité が広く用いられていて，これは人口1000人あたりの出生数を指す。その後，fécondité がクローズアップされてきて，今では出生率と言えば合計特殊出生率のことを意味するようになった。こちらは，ひとりの女性が生涯に生む子供の平均数を指す。これもトッドを訳す中で生じた苦心談の一つだ。

鈴木：このあたりで終わりにしたく思います。学ぶところの多いお話しでした。本日は，ありがとうございました。

インタヴューを終えて

留学中の1999年3月に石崎氏に連れられてエマニュエル・トッドのパリの家を訪れた。石崎氏がトッドにインタヴューをするというので，録音と撮影の役で同行させてもらった。その日はトッドにとって，とある事情で人生の転機[9] となる日だったが，その後もトッドは『帝国以後』（2002年），『文明の接近』（2007年），『デモクラシー以後』（2008年），『アラブ革命はなぜ起きたか』（2011年），『家族システムの起源 I ユーラシア』（2011年），『不均衡という病』（2013年，H・ル＝ブラーズとの共著）と著作を発表し続けている。そして，ここにあげた著作のすべてを石崎氏は訳し，しかも『起源』を除いて，フランス語原著の刊行の翌年（『アラブ～』は同年）には翻訳を刊行している。こうした石崎氏の仕事ぶりについてトッドはこう述べている。

> 私の本を翻訳する際に，彼が私に差し向ける質問，これこれの文の意味を正確に規定して欲しいとの要求，こうしたものはその精緻さで私の意表を突くのが常である。作業を進める力強さ，複雑な作品を迅速に翻訳するその速さ，こうしたことはまさに桁外れと言うべきだろう。

8）*Après l'Empire, Essai sur la décomposition du système américain*, Gallimard, Paris, 2002.（『帝国以後――アメリカ・システムの崩壊』石崎晴己訳，藤原書店，2003年）

9）どんな転機か？「（離婚に伴い）2度目の妻が，ぼくの預金を全部持ち出してしまったのだ」，「エマニュエル・トッドを囲んで」前掲，165頁。

彼は私にとって，単なる翻訳者をはるかに越えた存在であることも，付け加えておきたい。[10)]

こうした石崎氏の翻訳を通して，わたしはトッドを学んできた。時には，氏から直接お話を伺う機会にも恵まれ，さらには，トッドのインタヴュー記事の翻訳の仕事を世話してもらったこともある[11)]。今回のインタヴューを通しても，多くのことに気づかされた。なかでも，前稿での父系化と直系家族の区別や，本稿での宗教イデオロギーの問題は，自らの理解がまだまだ拙いことを知る機会になった。

トッドは石崎氏について「重要な人間について語ることは難しい」[12)]と言う。恐れながら，わたしも同じ思いでこの後書きを記している。良き師に学べたことを幸せに思う。

参考文献

主な参考文献

・石崎晴己『エマニュエル・トッドの冒険』，藤原書店，2022年。

――本稿で言及した主なエマニュエル・トッドの著書（表記のないものは藤原書店より刊行）

・『移民の運命――同化か隔離か』石崎晴己・東松秀雄訳，1999年。
・『帝国以後――アメリカ・システムの崩壊』石崎晴己訳，2003年。
・『不均衡という病――フランスの変容 1980-2010』〔H・ル・ブラーズとの共著〕，石崎晴己訳，2014年。
・『家族システムの起源　I　ユーラシア』上・下，石崎晴己監訳，2016年。
・『我々はどこから来て，今どこにいるのか？』上（民主主義の野蛮な起源）・下（アングロサクソンがなぜ覇権を握ったか），堀茂樹訳，文藝春秋，2022年。

10）トッド「石崎晴己との出会い」石崎晴己訳，青山学院大学総合文化政策学会『青山総合文化政策学』5号，2012年，13頁。
11）トッド「イスラム恐怖症の虚構」石崎晴己・鈴木隆芳訳，『環』32号，2008年，藤原書店，78-82頁。
12）トッド「石崎晴己との出会い」前掲，9頁。